



『ネコを撮る』

岩合光昭/文 朝日新聞社 2007

岩合さんは、有名な動物写真家。猫が大好きな岩合さんの猫の撮りかたは、ネコ好きなら誰しも学びたいところ。この本を読んで、『ニッポンの猫』を眺める、そして我が家や近所、旅先のネコを撮りにでかけたい。

『ノラネコの研究』

伊澤雅子/文 福音館書店
1994

普段、近所を歩くかわいいノラネコたち・・・しかし、いったい朝から晩までどのような暮らしをしているのかは知らない。著者は、朝から1匹の猫を追いかけて、徹夜してまでノラネコの生態にせまっている！ 読んだ後には、ご近所のネコが気になっちゃうかも？

『ゴースト・ドラム 北の魔法の物語』

スーザン・プライス/作 福武書店 1991

これは一本のカシの木につながれた一匹の猫が語る凄絶な愛の物語。呪いの太鼓ゴースト・ドラムの言葉を解する若き女魔法使いチンギスは、生まれたときからずっと塔の一室に幽閉され、ただの一度も外の世界を見たことのない皇子サファの心の叫びを聞く。チンギスの手によって難を逃れたサファはチンギスの弟子となるが、残忍な女帝マーガレッタと邪悪な魔法使いクズマの姦計により、チンギスは殺され、サファは再び幽閉されてしまうのだった。この物語の結末をハッピーエンドととらえるかどうかはあなた次第。北欧の民話風味の上質なファンタジー。1987年カーネギー賞受賞。

『猫の事務所 ある小さな官衙に関する幻想』 宮沢賢治/作

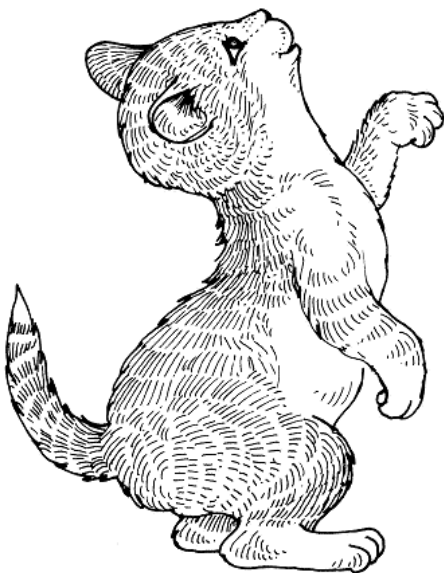
特に「いい話」でも「おもしろい話」でもないのですが、なんとなく心に引っかかる本です。近頃また報道されることが多くなったいじめの問題と関連づけて読むこともできそうです。本の中では「天の声」が強引に話を終わらせますが、現実を生きるわたしたちは、自分たちの手で問題を解決するしかありません。

『黒猫／モルグ街の殺人』 ポー/著

動物好きの優しい男が黒猫を飼った。しかし飲酒によって人格が変わっていった男は、その黒猫を虐待の末、殺してしまう。男の狂気にとりつかれた恐怖がまるで映像を見るかのごとく感じられる短篇。

『猫語の教科書』 ポール・ギャリコ/著 筑摩書房

猫はあなたに飼われているのではなく、猫があなたの家に乗っ取ってるって知ってましたか？本書は、猫による、猫のための、人間のしつけ方マニュアルです。かわいいしぐさも表情も、実はぜーんぶ計算しつくした上での演技。うちの子が、頭の中ではこんなことを考えていたなんて……。でも、猫好きなら許しちゃう？第14章を読むと、ちょっと救われます。





『猫は殺しをかぎつける』

リリアン・J. ブラウン／著 早川書房 1988

新聞記者クィラランはシャム猫のココとヤムヤムを飼っている。ココは今までに何度かクィラランに事件解決の手がかりを教えてきた利口な猫だ。クィラランの昔の恋人で陶芸家の女性の失踪をめぐり、クィラランとココのコンビが真相をさぐる。惜しくも去年著者が亡くなったが、猫好きにはたまらないシリーズの一冊。

『猫の地球儀 焰の章』

『猫の地球儀 幽の章』

秋山瑞人／〔著〕 メディアワークス 2000

舞台は棄てられた宇宙コロニー「トルク」。そこは猫と、猫が操るロボット達の世界。物語の軸となるのは二匹の天才猫。天才スパイラルダイバー・白猫の焰（ほむら）と地球儀を目指す三十七番目のスカイウォーカー・黒猫の幽（かすか）。二匹の猫の生き様は、夢を追うことの厳しさと、孤独、そして伴う犠牲の重さを読む者の胸に突きつけてくる。卓越した描写力が光る、奇才秋山瑞人初のオリジナル作品。



『吾輩は猫である』

夏目漱石／著

漱石の文章を読むといつも上手いなあと思う。美文であるとか、表現が巧みであるとかをあまり感じさせることなく、すんなり読ませてしまうところが、上手い。雑誌や新聞小説で活躍した人であるので、短い文章の中に続きを読みたくくなるようなエッセンスをぐっと凝縮させる技術に長けているのだと思う。本作は漱石最初の長編小説である。猫の眼を通した人間模様が奇妙で可笑的。



『たかが猫、されどネコ』

群ようこ／〔著〕

角川春樹事務所 2001

元イヌ派の著者が一匹のノラ猫をなぜか飼うことになる。不細工なその猫と暮らすことにより自身も教えられる事が多々ある。猫との愛情物語。

『三毛猫ホームズの怪談』 赤川次郎／著

本書は雑誌に掲載されていた『三毛猫ホームズの冒険』を加筆修正・改題したもの。

警視庁の刑事とその姉が遭遇する難事件を飼い猫である「ホームズ」が解決するユーモアミステリー。今も書き継がれているシリーズ第一弾であり、最高傑作。「幽霊シリーズ」もある。